

気候変動枠組条約の COP19 と MOP9 における温室効果ガス排出をめぐる議論

2013年11月11～23日まで、ポーランド・ワルシャワにおいて、気候変動枠組条約の COP19 (第19回締約国会議) と京都議定書の MOP9 (第9回締約国会合) が開かれた。

まず、同年6月に開かれた ADP2-2 (強化された行動のためのダーバン・プラットフォーム特別作業部会第2回会合第2部) を受けて (本誌2013年9月)、2020年枠組みについては、各国は、国内準備を自主的に進め、COP21に十分先立って (可能ならば2015年3月までに) 約束案を示すこと、および、付随して提供すべき情報は COP20 で特定されることが合意された。また、2020年までの削減の強化に向けて、関連会合の開催スケジュールが決められた。なお、日本は2020年に温室効果ガス排出を2005年比で3.8%削減すると表明したが、1990年比では3.1%の排出増になるため、批判や失望が寄せられた。

次に、資金については、COP18以降の先進国による資金誓約の確認、気候資金に関する閣僚級対話の隔年開催 (2014～2020年)、気候資金の拡大のためのワークショップの開催、COP と GCF (緑の気候基金) との調整などに関する決定が採択された。開発途上国は、1000億ドルの目標額を確認するため、2016年までに700億ドルという中間目標を定めるよう求めていたが、先進国の反対が強く、具体的数字は盛り込まれなかった。

また、気候変動による損失・被害に関するワルシャワ国際メカニズムが、カンクン適応枠組みの下に設立されることとなり、執行委員会の設立 (暫定措置)、具体的な機能、2ヵ年作業計画の策定、執行委員会の構成や手続きの検討 (2014年12月)、COP22での見直しなどが合意された。

他方、REDD+ (開発途上国における森林の減少・劣化による二酸化炭素の排出削減) については、運用のための基本枠組みが定められた。

ところで、主要 NGO は、合意内容が乏しく課題を先送りしているとして、会期末に一斉退場を行った。

環境の本

ミツバチ大量死は警告する

著 ● 岡田 幹治

筆者は朝日新聞ワシントン特派員、論説委員などを務めた環境、食の安全などを専門とするジャーナリスト。世界で広がるミツバチの大量死とネオニコチノイド系と呼ばれる新農薬の実態を追及し、欧州連合が2013年12月から規制を開始したものの、我が国の対応が遅れている背景にも言及している。本書は、暮らしの中にある環境化学物質にも触れ、胎児や幼児への健康影響についてもレポートしており、化学物質づけの社会から脱出する道として①農薬の規制を強める②農薬を使わない農業を目指す③化学物質をもれなく管理する④暮らしを変える、を提案している。「ミツバチや農薬に関心のある方々はもちろん、子や孫の心身の発達に不安を感じている方々や、妊娠中または妊娠の可能性のある女性たちにぜひ読んでいただきたいと思っている」(筆者)。(集英社新書、760円+税)



みつばち飼う人この指とまれ!

著 ● 御園 孝

この本には日本列島の二ホンミツバチをこよなく愛する人たちから寄せられた、失敗談、成功例、ミツバチに起きている農薬被害の現場報告が紹介されている。上述の本にあるように、作物の受粉用に大量に使われていた西洋ミツバチの大量死が世界中で発生し、農薬の影響が疑われるなか、昔から日本の各地で飼育されていた二ホンミツバチへの人びとの関心が高まっている。養蜂にあまり手がかからず、ダニにも強く、社会性の強い集団生活を営む二ホンミツバチは自然を守るシンボルとして、飼育者が増えているという。銀座ミツバチプロジェクトから長崎県・壱岐島の飼育例まで、わかりやすいイラストと体験談で紹介されており、素人にも養蜂の楽しさが伝わってくる。



(高文研、2,000円+税)